

## A・G・ブラガーリアとピクトリアリズム

### —— 未来主義者が理想とした芸術写真のあり方

慶應義塾大学 角田 かるあ

本発表の目的は、イタリア未来派の芸術家アントン・ジュリオ・ブラガーリア (Anton Giulio Bragaglia, 1890-1960) のピクトリアリズムに対する姿勢を手掛かりに、彼が理想とした芸術写真のあり方を再考し、彼が弟アルトゥーロ (1893-1962) とともに行った実験「フォトディナミズモ」の写真史における位置付けを明らかにすることにある。

1911年に考案されたフォトディナミズモは、長時間露光を用いて被写体の運動の軌跡を印画紙上に可視化する写真実験である。写真史において同実験は、外見的特徴の類似により、しばしばマイブリッジやマレーらによる動体写真の延長線上に位置付けられてきた。しかし、フォトディナミズモを「写真を、純粹化し、高貴にし、真に芸術へと高める」方法とみなした兄弟は、実験考案の当初より、これが「科学的な」動体写真と混同されることを拒んだ。同実験をめぐる芸術理論の集大成『未来主義フォトディナミズモ』(1913)において著者アントン・ジュリオは、フォトディナミズモの芸術的正当性を強調し、その根拠を被写体である人物の精神状態までもが途切れることなく可視化されることに置いた。

兄弟がフォトディナミズモを差別化した対象は、既存の動体写真だけではない。前掲書の記述からは、第一に、写真における絵画模倣の否定、第二にカメラの操作の無作為性を、兄弟が重視していた事実が窺える。これらを単純に読みとるならば、彼らの姿勢は、同時代の写真芸術の主流であったピクトリアリズムの批判に重なる。その意味で、フォトディナミズモをいわゆる「モダニズム」写真の先駆に位置付けることも不可能ではない。しかし、アントン・ジュリオが執筆したテキストを精読するならば、兄弟がピクトリアリズムを頭ごなしに否定していたわけではない事態が浮かび上がる。

たとえば、1912年に雑誌『未芸術写真』に寄稿したエッセイにおいてアントン・ジュリオは、ピクトリアリズムに基づく同時代の芸術写真の状況を分析した上で、ローマ万国博覧会内国際写真展における出展作品を作家別に批評している。作品によっては好意的な批評も見受けられる。他方、同時期には同時代のイタリアにおけるピクトリアリズムの大家グスターヴォ・ボナヴェントゥーラ (1882-1966) や美術史家アドルフォ・ヴェントゥーリ (1856-1941) らにインタビューを行い、写真芸術の現状と課題を検討している。いずれにおいても、議論の中心には「写真の芸術的正当性」をめぐる問題が確認される。

本発表では、上記のテキストに基づいてピクトリアリズムに対するアントン・ジュリオの両義的な態度を精査し、これにフォトディナミズモをめぐる作品と芸術理論を突き合わせることで、彼が理想とした芸術写真のあり方を再考する。その上で、「モダニズム」に照らし合わせた際の同実験の特異な位置について検討していく。